

皐月とは、耕作を意味する古語「さ」から稲作の月として「さつき」になったという。
漢字「皐」には神に捧げる稲の意味もある。

薰風そよぐ—

Jingu Sacred Rice Paddy of May

—5月の神宮神

ひのかみのみこと あまのかきた も み た
日神尊、天垣田を以ちて御田としたまふ。

(天照大御神は、御自ら神田で稲を育てている)

—日本書紀 卷第一 神代上—

稲作は神業。米には「稲魂」という魂が宿るという。

日本書紀の“斎庭の稲穂の神勅”によると、天照大御神の命を受けた邇邇芸命が天孫降臨の際、国民の主食にするように大御神自ら天狭田長田で育てた稲穂を授けられたのが稲作の起源とされる。

あ たかまのはら きこ ゆには いなほ も またあ みこ まか
吾が高天原に御しめす斎庭の穂を以ちて、亦吾が児に御せまつるべし

—日本書紀 卷第二 神代下—

風薫る五月初旬、神宮神田では「御田植初」が行われる。神宮神田は内宮から約3キロ下った五十鈴川のほとり、楠部町忌鉾山の裾に古のままの姿で存在する。倭姫命の巡幸の折、「この地に五十鈴川の清らかな水を引いて稲を作りなさい」と言葉を残されたと伝えられる。

又伊鈴之御河之漑水道田_{尔波。} 苗草不敷_{志天}作食_{詔支。}

—倭姫世紀—

神様に供える御料米は、その由緒ある神宮神田で古来の方法に則して清浄に育てられている。

4月、桜の満開の頃、神田下種祭において祈りをこめて蒔かれ成長した籾種が、地元楠部町の「御田植保存会」の人々の奉仕により植えられていくのが御田植初である。すげ笠に白い装束、赤いタスキ掛けの早乙女たちが、一列に並び田楽の雛子に合わせて早苗を植えていく。田に張られた水に反射して写る姿は、まるで絵画のようである。田植えが終わると大団扇2本を交差させて神田を回る“団扇合せ”が行われる。その後、神宮撰社大土御祖神社に向かい豊穰を祈り、田舞・お雛しが入り終了する。

「ハエヤーハエ、ハエヤーハエ」

早く稲が育ち豊作でありますように・・・

神宮での祭りは年間数えきれないが、その多くは稲作に関わるものである。

2月の祈年祭でその年の豊作を祈る事から始まり、収穫の喜びと感謝を込めて初穂を神様に捧げる最重儀である神嘗祭、さらに天皇陛下が新穀を召し上がる新嘗祭まで、稲を中心とした多くの祭が行われる。

山見れば高く貴し 河見ればさやけく清し 水門なす海も広し

万葉集に謳われた伊勢の美しい自然の中で春に豊作を祈り、秋の稔りに感謝する祭をつづけてきたのである。

古くから日本の国土を讃えて「豊葦原瑞穂国」と呼びならわすのも、豊かに稲が実った様子こそが日本の原風景として捉えられているからであろう。ドイツの化学者、ユストゥス・フォン・リーヒッヒは日本の水田耕作を「土地を永久に保つ無類の農法」と称えた。日本人は神話の時代からその有り様を伝えてきたのである。

御田植初が終わると伊勢は初夏を迎える。

植えられたばかりの早苗が5月の風に気持ちよさそうに揺らいでいた。

▶ 神饌 神様の食事から“食の原点”を見つめる (南里空海/著 世界文化社 L174/ナ)

図書館だより
2012年5月号より